

## VI 2018年度博士後期課程科目別ガイド

### 教育学研究特殊科目（RT科目）

科目コード	016100
科目名	授業特殊研究A（歴史・理論）
担当教員	廣嶋龍太郎

- テーマ 「先人の教育思想から自身の教育観を形成する  
—児童中心主義の教育思潮とフレーベルの教育思想をきっかけに—

私たちが「教育」について考える時、その多くは各自の教育体験を土台としています。教育という行為は人と人の中で生じるものであり、そこには個別の体験に由来する多様な考え方が見出されることでしょう。しかし、「教育の歴史・理論」を考えるときには、教育体験に共通するような「価値」や「意味」もしくは体系立った「論理」が求められることとなります。

教育の歴史については、古代ギリシャにまでさかのぼることができますが、この科目では学校における「授業」という概念が広く共有されるようになった近代以降を対象として、教育思想の特徴を理解したいと考えます。

近代の代表的な教育思想の一つとして、子どもを中心とした教育観の展開を容易に指摘することができるでしょう。「子どもの視点から教育を考える」ことの重要性を強調し、後世に深い影響を及ぼした思想家については教育の歴史で頻繁に取り上げられますが、個々の人物の生涯や著作について触れたものを精読する機会はあまり多くありません。そのため、彼らがどのような経緯をたどって教育思想を抱くに至ったのかを詳しく検討することで、それらの思想の形成について理解してもらいたいと思います。

児童中心主義の教育観の系譜はルソーを一つの起点とし、ペスタロッチ、フレーベル、エレン・ケイ、デューイ、モンテッソーリらがこれに連なります。また、日本でも大正自由教育運動の教育思想家たちはこの影響を受けています。本年は、この中でフレーベルに注目して、その生涯を追いながら教育思想を理解してもらいたいと思います。

- 研究の視点

- (1) 時代背景の理解

- フレーベルの思想形成の土台となる時代の政治、文化、社会などの影響について、各自の関心に応じて多様な観点から理解する。

- (2) 原典となる資料の読解

- フレーベルの教育思想について、代表的な古典資料を読解する。

(3) 現在の教育的論点との関連

思想家たちのどの論点が現在の教育的論点に関連しているか考察する。

(4) 自身の教育観と対比する

教育思想家の生涯について学ぶことを通じて、自身の教育観について再考する。

●レポート課題と学習ポイント

課題1

フレーベルの教育思想の要点をまとめた上で、それに対する自分の考えを述べなさい。

フレーベルの生涯や彼の生きた時代の歴史的背景を踏まえて論点をまとめ、自身の考えを示してください。テキストとしては、初期の代表的な伝記であるプリューファーの『フリードリヒ・フレーベル—その生涯と業績—』を選びました。プリューファーの書はフレーベル研究の古典の中でも代表的なもので、今日のフレーベル研究においても参考にされる文献の一つです。フレーベルに近い時代を生きた著者による同書を読み進めると難解な表現もあるかと思いますが、個別の用語にとられるよりも、まずは全体を通読し、自身の興味がある点を中心にまとめていきましょう。残り2冊のテキストは、本課題を作成するうえで参考になると思います。

特に、テキスト『教育の論究』改訂版の第4章には、ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、エレン・ケイ、デューイ、モンテッソーリの思想的潮流が論じられており、これらの人物は今日に通じる児童中心主義の思想の源流となった人物たちです。また、同書の第3章と第5章は西洋と日本の教育の歴史を論じており、人物の時代背景や、日本に与えた影響を理解するのに役立ちます。人物が教育的な思想を形成するうえでは、時代背景の影響や特徴的な体験が土台になります。フレーベルにおいては、牧師の家に生まれた出自、ペスタロッチの学園における教育体験、ナポレオン戦争への従軍、自ら運営するカイルハウの学園の教育実践などを経て、今日に通じる幼稚園教育の理念へとたどり着きます。単に教育思想をまとめるだけでなく、その背景を踏まえることで、より深い理解に至ることを期待します。

課題2

現代の日本社会における教育的課題を任意にとりあげ、その概要を説明した上で、自分の考察を自由に展開しなさい。

教育思想家たちの考え方を、そのまま現在の日本社会の教育的課題に適用することは、時代や地域などの条件も異なり、いうまでもなく困難ですが、現実の教育問題を考えていく手がかりが多く見いだされるでしょう。

そこで、教育思想家の思想形成を学んだことを前提に、各自の関心に応じて、「教育を考える」という作業を課題とします。レポート作成者の教育的体験を前提とする場合は、課題1でたどったような時代的背景や教育的体験の意義を参考に、自身の教育観を論じてください。また、体験によらずとも、ペスタロッチやフレーベルを土台にすれば、今日の特

徹的な教育課題として子育てをめぐる諸問題（共働き、少子化、過保護、核家族など）、や教師養成の問題などをとりあげることができるでしょう。他にもテキスト『教育思想史』に登場する多様な思想家からは、様々な教育的課題を考察するきっかけが得られるでしょう。その他にも、教育環境としての地域・社会の問題、情報化社会における子どもの生活、教育格差と学力問題など、今日的な課題と関連付けて論じてみてください。

●配本予定テキスト

- (1) ヨハネス・ブリューナー『フリードリヒ・フレーベル—その生涯と業績—』東信堂、2011年
- (2) 乙訓稔編著『教育の論究』改訂版、東信堂、2008年
- (3) 今井康雄編『教育思想史』有斐閣、2009年

●参考文献

- (1) 小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1987年
- (2) 小笠原道雄『フレーベル』清水書院、2000年
- (3) 日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『増補改訂版 ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部、2006年
- (4) 乙訓稔『西洋近代幼児教育思想史』第二版、東信堂、2010年
- (5) 佐々井利夫・樋口修資・廣嶋龍太郎共著『教育原理』明星大学出版、2012年

科目コード	016200
科目名	授業特殊研究B（実践・評価）
担当教員	吉富芳正

●テーマ 「我が国における教育課程と評価の歩み」

本科目では、第二次大戦後の我が国の教育課程と評価を関連付けながらその歩みを振り返るとともに、現状と課題について検討することになります。

学校における教育の実践と評価には、国が定める教育課程の基準である学習指導要領と指導要録における評価の考え方や方法が大きな影響を及ぼします。そこで、戦後の各時期における学習指導要領の改訂の考え方や指導要録の評価の特質を辿って今日に至る経緯を把握し、これから求められる教育における評価の在り方について考えていきます。

研究に当たっては、学校教育が目指すものや教育の実践面で求められる工夫の変遷との関わりに留意しながら、評価の考え方や方法はどのようなことに重点が置かれるようになったのか、それらの課題は何か、これからどのような方向を目指すべきかについて検討していただきたいと思います。

なお、評価については、評価に求められる役割、目標に準拠した評価（絶対評価）・集団に準拠した評価（相対評価）・個人内評価のそれぞれのメリット・デメリット、観点別学習状況の評価と評価規準等の工夫、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価などの評価方法の工夫、これらを含めた指導と評価の計画の作成などについての具体的な検討が重要になります。

●研究の視点

- (1) 各時期の学習指導要領の改訂の考え方や特質
- (2) 各時期の指導要録の改訂の考え方や特質
- (3) (1) と (2) の関連
  - ・「新しい学力観」と観点別学習状況の評価
  - ・「生きる力」と目標に準拠した評価の一層の重視
  - ・資質・能力の3つの柱、学力の三つの要素と評価の改善 など
- (4) 授業評価とカリキュラム評価
- (5) 評価に関する研究と実践の経緯と動向
  - ・到達度評価
  - ・形成的評価
  - ・パフォーマンス評価、ルーブリックの作成
  - ・ポートフォリオ評価
  - ・自己評価、相互評価 など

●レポート課題と学習ポイント

**課題1** 我が国の学習指導要領の変遷と関連付けながら各時期の指導要録にみる評価の特質について論じなさい。

我が国における指導要録の位置付けや内容に着目し、学習指導要領の改訂との関連にも目を配りながら、それぞれの時期における評価の在り方の特質について検討してください。例えば、①個々の児童生徒の指導上必要な原簿としての学籍簿（昭和23）に始まり、昭和30年の改訂で指導及び外部に対する証明等の原簿となった、相対評価中心の頃における教育効果の測定の考え、②昭和50年代に入ってから学習到達度評価の提唱や指導要録の改訂以降、相対評価へのかげりがみられるようになるにつれ、教育の実践の改善につなげようとする動きの加速といったように、時期の区分を設け、それぞれの特質を解き明かすことが期待されます。

**課題2** 今日における目標に準拠した評価（絶対評価）を中心とした評価の考え方や方法について検討した上で、今後の評価の在り方について論じなさい。

今日、指導要録の評価では目標に準拠した評価（絶対評価）が中心となり、個人内評価や集団に準拠した評価を必要に応じて組み合わせることができるようになってきました。これらのメリット・デメリットを押さえた上で、これからの教育の方向性とも重ね合わせながら評価をどのように改善していくべきかについて述べてください。

これからの評価の考え方や方法を考えるためには、これまで取り組まれてきている、観点別学習状況の評価の推進と評価規準等の工夫、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価といった評価方法の工夫、評価計画も含めた単元指導計画の作成などに目を向けることが大切です。その際、これからの教育における評価が果たすべき役割についてしっかりした考え方をもち、それを見失わないよう留意してください。

なお、新学習指導要領を踏まえた学習評価や指導要録の在り方については、現在、文部科学省で検討されており、平成30年の秋頃まとまる予定といわれています。その結果が示された後は、これも手がかりにしてください。

●単位修得試験の評価基準

研究の視点を踏まえ、調べ、考察を行っていること。

論旨を明快に示し、論理的にまとめられていること。

テキストを熟読し、著者の意見と自分自身の意見を区別して記述すること。

●配本予定テキスト

- (1) 吉富芳正編 『現代中等教育課程入門』 明星大学出版部 2014
- (2) 高浦勝義 『指導要録のあゆみと教育評価』 黎明書房 2011
- (3) 高浦勝義 『絶対評価とルーブリックの理論と実際』 黎明書房 2004

●参考文献

- (1) 文部科学省『学制百年史』、『学制百二十年史』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318221.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318221.htm)
- (2) 国立教育政策研究所「学習指導要領データベース」  
<http://www.nier.go.jp/guideline/>
- (3) 水原克敏『学習指導要領は国民形成の設計書Ⅷ〔増補改訂版〕その能力観と人間像の歴史の変遷』 東北大学出版会 2017
- (4) 文部科学省ホームページ「学習評価・指導要録 関係報告・通知」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/1304432.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304432.htm)
- (5) 教育課程審議会 『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）』 平成12年12月4日
- (6) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』平成22年3月24日  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm)
- (7) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』平成28年12月21日  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)
- (8) 国立教育政策研究所ホームページ「教育課程研究センター 指導資料・事例集 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」  
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html>
- (9) 天野正輝『教育評価史研究』東信堂 1993
- (10) 田中耕治『人物で綴る戦後教育評価の歴史』三学出版 2007
- (11) 高浦勝義『ポートフォリオ評価法入門』明治図書 2000
- (12) 松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準ブックレットNo.7 2007
- (13) 三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか—中学校社会ア  
kのカリキュラムと授業づくり—』日本標準ブックレットNo.11 2010
- (14) 田中耕治編著 『パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』 ぎょうせい 2011
- (15) 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか』 図書文化社 2016
- (16) 西岡加名恵『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』 明治図書 2016

科目コード	016500
科目名	授業特殊研究E（教育心理学）
担当教員	杉本明子

●テーマ 「教授・学習研究における心理学的アプローチ」

学校、職場、地域社会など様々な場面において、私たちは絶えず新しいことを学習し、また、状況に応じて他者に必要な事柄を教えるという活動に携わっています。このような教授・学習という活動における人間の行動と心的過程を科学的に解明しようとするのが心理学（特に、教育心理学・認知心理学）という学問です。

これまで、心理学の領域では、教授・学習に関わる様々なテーマ（生物学的基盤、発達、感覚、知覚、意識、記憶、言語、思考、動機づけ、感情、知能、人格、社会性、障害、測定と統計的方法など）に関して世界中で膨大な知見が蓄積されてきました。しかしながら、教授・学習に関して私達が取り組まなければならない研究課題は未だ多く残されています。

本講では、受講生が自分自身の研究テーマについて心理学的な観点から概観し、今後の研究計画を立案するための礎を作ることを目的としています。具体的には、受講生が（1）配本テキストで取り上げられているテーマ（章）のうち自分自身の研究テーマに関連する章を読み（さらに、関連研究をレビューし）、これまでどのような研究が行われてきて何が明らかにされてきたのか、自分の研究はどこに位置づくのか、自分の研究の意義は何かについて考察する、（2）自分の研究テーマに取り組んでいくためにはどのような研究方法を用いるべきかについて検討する、そして最終的には、（3）博士論文のプロポーザル作成の礎を作ることを目指しています。

●研究の視点

- （1）教育心理学・認知心理学における代表的な研究テーマ・研究方法の理解
- （2）自分自身の研究テーマに関する先行研究のレビュー
- （3）自分自身の研究テーマ・目的に適合した心理学的研究方法の理解

●レポート課題と学習ポイント

**課題1** 『第15版 ヒルガードの心理学』と『認知科学への招待』で取り上げられているテーマ（章）のうち自分自身の研究テーマに関連する章を読み（必要があれば、これらの文献以外で関連する先行研究をレビューし）、これまでどのような研究が行われてきて何が明らかにされてきたのか、自分の研究はどこに位置づくのか、自分の研究の意義は何かについて考察しなさい。

**課題2** 『心理学の実践的研究法を学ぶ』（必要があれば参考文献やその他の文献）を読み、自分の研究テーマに取り組んでいくためにはどのような研究方法を用いるべきかについて検討しなさい。

課題1・2ともに、配本テキスト及び参考文献を参考にして、自分の研究課題の学問的位置づけと意義及び研究方法について考察してください。研究テーマ・課題は受講生が自由に選んで構いません。また、本講は、博士論文のプロポーザル作成の礎を作ることを目的としていますので、配本テキストや参考文献として挙げられている文献以外に関しても、積極的にレビューして下さって結構です。

●配本予定テキスト

- (1) 内田一成 (監訳) (2012) 『第15版 ヒルガードの心理学』 おうふう.
- (2) 下山晴彦・能智正博 (編) (2008) 『心理学の実践的研究法を学ぶ』 新曜社.
- (3) 大津由紀雄・波多野誼余夫 (編著) (2004) 『認知科学への招待』 研究社.

●参考文献

- (1) 平山満義 (編著) (2006) 『質的研究法による授業研究：教育学・教育工学・心理学からのアプローチ』 北大路書房
- (2) 遠藤健治 (著) (2002) 『例題からわかる心理統計学』 培風館
- (3) 兵藤宗吉・須藤智 (編著) (2003) 『認知心理学基礎実験入門』 八千代出版
- (4) Levitin, D. J. (2002) (編)『Foundations of Cognitive Psychology: Core readings』 The MIT Press.
- (5) Carver, S. M. & Klahr, D. (2001) 『Cognition and Instruction: Twenty-Five Years of Progress』 Lawrence Erlbaum Associates.
- (6) Anderman, E. & Anderman, L. H. (2009) 『Psychology of Classroom Learning』 (Volume 1 & 2) GALE Cengage Learning.
- (7) Schiffrin, D, Tannen, D. & Hamilton, H. E. (2001) 『The Handbook of Discourse Analysis』 Blackwell Publishers Ltd.



科目コード	016501
科目名	授業特殊研究F（教育行財政）
担当教員	樋口修資

## ●研究テーマ

我が国の初等中等教育行政は、国が定める学校教育にかかる基本的な枠組みや財政的保障の下で、都道府県や市町村が主体となって、それぞれの役割分担・協力をしつつ、実施されてきたが、このような中、教育委員会は、地方における教育行政の直接的な担い手として重要な役割を果たしてきた。

しかしながら、今日、学校教育を取り巻く課題が山積する中で、学校の設置管理運営についての責任主体である教育委員会の制度の形骸化や機能の不全などについて厳しい指摘がなされ、教育委員会の廃止論や諮問機関・審議機関への組み換えと首長への権限移譲などの議論が地方分権と規制改革の方面から提起されるに至っている。

戦前の中央集権的・官僚主義的な教育行政システムへの痛切な反省に立って、教育の民主化・地方分権化・教育の自主性保障を図るものとして、戦後教育改革に伴い創設された教育委員会制度は、地方教育行政の責任機関として、政治的党派性を有する独任制機関である首長の執行する一般行政から独立して教育行政を担う「合議制の執行機関」の役割をもち、教育において本質的に要請される「教育の政治的中立性」を担保し、公正な民意を反映しつつ、公正中立な教育行政を行うことをねらいとするものであって、一般行政との「総合化」・「合理化」・「簡素化」になじまない性質を有している。

しかしながら、制度創設以降、教育委員会制度の在り方に対する厳しい指摘がなされ、逐次改革が行われてきた経緯があるが、平成24年の滋賀県大津市の中学校におけるいじめ自殺事件の取り扱いをめぐる市教育委員会の危機管理能力不足を契機として、政府の教育再生実行会議は、地方教育行政の権限を首長に移行させることを提言し、これを受けて、平成26年地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正が行われ、教育委員会制度は大きく変容することとなった。

したがって、この研究テーマにおいては、教育委員会制度の意義と役割の本質は何であるか、戦後教育改革の理念と哲学にも照らし合わせ、今一度検証を加えつつ、時代の進展に対応した地方教育行政のシステムを構築していく上で、教育委員会制度の改革すべき問題と課題は何であり、どのような改革の思想と哲学をもって新しい地方教育行政の制度化を図っていくべきかについてその方向性を模索することとしたいと考えています。

## ● 研究の視点

- (1) 戦後教育改革における地方教育行政制度の創設の理念についての理解と認識
- (2) 「教育の政治的中立」の意義と「不当な支配に服することなく」（不偏不党性の原則）の理念への洞察
- (3) 地方における一般行政と教育行政の範囲と限界への洞察

- (4) レイマン・コントロールとプロフェッショナル・リーダーシップの関係性の考察
- (5) 教育委員会と公立学校とのかかわり（統制から自主自律へ）の座標軸の構築
- (6) 「民意の反映」と教育の中立性を確保するための「合議制の意思決定」との整合性をどう図るか。

## ● レポート課題と学習ポイント

**課題1** 戦後、教育の地方分権が進められる中で、国（文部省）の地方教育行政（都道府県・市町村教育委員会）への関与の在り方は、どのような歴史的変遷を辿ったか概括するとともに、国の地方への教育行政に関する関与の在り方についての背景思想と問題点などについて考察を加えなさい。

昭和23年教育委員会法の制定に伴い発足した教育委員会制度は、国と地方との関係性について、国は全国的な観点から教育課程の基準設定や財政支援などを行うほかは、学校の設置管理運営については、地方教育行政の自主性に委ねることが原則とされたものの、昭和31年の地方教育行政法の制定に伴い、教育長の任命承認制度、国の地方への措置要求権の創設など「国の指導性」、「国・都道府県・市町村一体としての教育行政制度の確立」が前面に打ち出され、教育行政の中央統制への回帰が図られた。その後、平成11年の地方分権一括法の制定に伴い、地方分権を推進する観点から、教育行政についても集権主義的な諸施策の廃止・見直しが行われ、国と地方との関係性は、対等・平等なものであることが明確にされ、教育長の任命承認制度など地方分権に反する教育政策は廃止等の見直しが行われた。しかしながら、平成19年の地方教育行政法の改正に伴い、再び、国の地方教育行政への関与の在り方が問題とされ、国の都道府県・市町村教育委員会に対する是正の要求及び是正の指示の権限が認められ、「国の指導性」の下に地方における教育事務について国の権力的な関与を認める制度が創設されるなど、歴史的変遷に伴い、国と地方との教育行政をめぐる関係性は変容してきている。その変容の背景にある国の考え方の基調は何であったのか分析・考察することがこの課題のポイントである。

**課題2** 平成15年の実践首長会の提言では、「教育委員会制度で重視されている政治的中立性の確保については、すでに東西のイデオロギー対立が終焉した現下において、・・・地方行政の現場では、政治的介入の懸念は杞憂となっている」とし、首長への教育行政の権限移譲を主張しており、平成26年6月成立の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正法においても、首長の教育行政への関与を強める教育委員会制度改革が行われたが、教育委員会制度の背景理念である教育の政治的中立性や教育行政の自主性の確保という意義はもはや失われているとの認識についてどう考えるか論じなさい。

戦後教育改革においては、戦前教育が国家と政治に隷属したことの反省に立って、「教育権の独立」の視点に立って、教育・教育行政の民主化・分権化・自主性保障を図ることを最重要な課題とし、この観点に立って、地方教育行政が「不当な支配に服することなく」（旧教育基本法第10条）、公正な民意を反映して実施されるよう、合議制の執行機関として地方教育委員会制度を創設したという経緯があることを十分考察する必要がある。

また、昭和 51 年の永山事件最高裁判決において、教育内容方法についての国の関与・決定を認める判決が下される中で、最高裁は、「もとより政党政治の下で多数決原理によってされる国政上の意思決定は、さまざまな政治的要因によって左右されるものであるから、本来人間の内面的価値に関する文化的な営みとし、党派的な政治的観念や利害によって支配されるべきでない教育にそのような政治的影響が深く入り込む危険があることを考えると、教育内容に対する右のごとき国家的介入についてはできるだけ抑制的であることが要請される・・・。」と判旨したように、教育＝内面的価値の形成に関する文化的な営みに、国や地方の直接的な政治的影響が及ぶことは、教育の本質に照らして重大な問題を提起しているといえ、地方行政の「総合化」・「合理化」などの観点からする教育行政への首長の介入の「政治性」の是非について十分な検証を行うことがこの課題のポイントである。

●配本予定テキスト：

- (1) 樋口修資『教育委員会制度変容過程の政治力学』(2011) 明星大学出版部
- (2) 樋口修資ほか共著『教育の最新事情』(2016) 明星大学出版部
- (3) 村上祐介編著『教育委員会改革 5 つのポイント』(2014) 学事出版

●参考図書

- (1) 中央教育審議会『地方分権時代における教育委員会の在り方について』(平成 17 年)
- (2) 中央教育審議会『教育基本法の改正を受けて緊急に必要とされる教育制度の改正について』(平成 19 年)
- (3) 木田宏『第 3 次新訂 逐条解説 地方教育行政の組織及び運営に関する法律』(平成 15 年)
- (4) 平原春好ほか共著『現代教育法概説 改訂版』(2004) 学陽書房
- (5) 樋口修資『教育政策論からみた教育委員会制度改革への一考察』(2012) 明星大学教育学部研究紀要第 2 号
- (6) 日本教育行政学会編『教育委員会「存続」の意義を問い直す』(2006) 日本教育学会年報 32 号
- (7) 徳久恭子『日本型教育システムの誕生』(2008) 木鐸社
- (8) 高橋寛人『危機に立つ教育委員会』(2013) クロスカルチャー出版
- (9) 村上祐介『教育行政の政治学』(2011) 木鐸社
- (10) 三上昭彦『教育委員会制度論』(2013) エイデル研究所

科目コード	016600
科目名	幼児教育特殊研究A（保育）
担当教員	齋藤政子

### ●研究テーマ

テーマは「乳幼児の発達と保育」ですが、最近の乳幼児期の発達に関する知見や教育思想についても触れながら進めます。

演習においては、受講する院生自身の研究テーマにひきつけて、進めていきますが、まずは、乳幼児期の言葉や認知・思考、自我の発達のプロセスなどを、おとなの意図的教育的働きかけとしての保育とのかかわりで学んでいきたいと思ひます。また、保育とは何か、教育とは何かという問題にも取り組んでいきたいと思ひます。

### ● 研究の視点

上記のテーマの研究の視点は下記の通りです。

1. 乳幼児期の発達について
2. 育児分野・保育分野での発達支援のあり方について
3. 保育とは何か、教育とは何か

### ● レポート課題と学習ポイント

乳幼児期の発達理論、教育理論双方から課題に迫っていきたくと思ひます。多くの文献に目を通すことも必要ですが、古典的な文献をじっくり読むことも大事です。理解不能の箇所はそのまま素通りしつつ、とにかく読み続けてみましょう。閃くところがきっとあるはずですので、その部分と自分のテーマとの関連を考察してみるとよいと思ひます。

また、拙著は4歳児保育のあり方についてまとめたものですが、第一部の理論編は、子どもの発達の捉え方、保育とは何かという問題への切り込み方の参考になると思ひますし、第二部の実践編は、その理論をどう具体化するかについてわかりやすくまとめられたものですのでぜひご一読をお勧めします。

**課題1** おとなが、子どもの成長・発達に、どうかかわっていくかという問題について論じなさい。その際、ご自身のフィールドに合わせ、保育・育児のどちらかを選んでください。

**課題2** フレイレのいう「教えるということ」の内実を幼児教育にひきつけて論じなさい。

●配本予定テキスト：

- (1) 齋藤政子 編著 『子どもとつくる4歳児保育』 ひとなる書房 2016
- (2) マーガレット・カー著 大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房 2013
- (3) パウロ・フレイレ著 里見実訳 『希望の教育学』 太郎次郎社

●参考図書

- (1) やまだようこ著 『ことばの前のことば』 新曜社
- (2) アンリ・ワロン著 久保田正人訳 『児童における性格の起源』 明治図書
- (3) ルビンシュテイン著 秋元春朗ほか訳 『一般心理学の基礎4』 明治図書
- (4) ドナルド・ショーン著 佐藤学・秋田喜代美著 『専門家の知恵』 ゆみる出版
- (5) パウロ・フレイレ著 里見実訳 『被抑圧者の教育学』 太郎次郎社
- (6) 大日向雅美 著 『新装版 母性の研究 その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』 日本評論社 2016

科目コード	016701
科目名	幼児教育特殊研究B（音楽教育）
担当教員	板野和彦

●テーマ 「音楽教育における理論と実践：ジャック＝ダルクローズを手がかりとして」

教育現場における音楽教育はこの数十年間で大きな変化をとげてきました。まず、取り上げる音楽そのものが変化してきたことを指摘する必要があります。ポピュラー音楽の台頭、日本の伝統的な音楽を含む諸民族の音楽が重視されるようになってきたこと、デジタル機器が導入されたことによる変化などはいずれも大きな転換を引き起こした要素です。そして、これら音楽の変化と平行して、これを受け止める子どもたちにも大きな変化があったと考えられます。少子化や家族の状況の変化による気質の変化、音楽は学ぶものというより楽しむものであり表現するものであるという捉え方の広がりなど、大きな変化が見られます。音楽教育に携わる教員はこのような変化を知り、それに対応してより良い音楽教育を展開してゆく必要があります。そしてそのためには音楽教育の目指すもの、理想とする子ども観、つまり音楽教育によってどのような子どもを育てたいのか、という教育理念について考えてゆく必要があります。

本研究でリトミックの創案者であるジャック＝ダルクローズを取り上げる理由は、彼の教育法であるリトミックが、音楽教育において身体運動を活用したユニークな教育法であったということに加えて、その教育理念が様々な変遷を経て、明確なかたちで提示されているからです。学生たちに和声学を指導する音楽教師としてそのキャリアを始めたジャック＝ダルクローズは音楽を聴き取ること、リズム、身体運動などに着目しながら音楽的な技術を身につける教育から、学習者の人間の一般的な諸能力を高める教育へと目指すところを高めてゆきました。

今回取り上げる『リズムと音楽と教育』はジャック＝ダルクローズが自身の音楽教育法を確立した時期に著された、彼の主著であり、「音楽教育において何を指すのか」ということが明確にされています。音楽教育研究では、指導法や教材など実面的側面が強調される傾向があり、またジャック＝ダルクローズの教育法であるリトミックにおいても「体験することによって学ぶ」という側面が強調されがちですが、ジャック＝ダルクローズをはじめとした音楽教育家たちの教育理念について学ぶことは、私たちが現代の日本における音楽教育を考える際に、その基礎となるものであると考えることができます。

●研究の視点

- (1) 現在の音楽教育の動向についての理解
- (2) 音楽教育史におけるジャック＝ダルクローズの位置づけ
- (3) ジャック＝ダルクローズの教育理念および実践的内容の理解
- (4) ジャック＝ダルクローズの思想が日本の音楽教育に及ぼした影響の検証
- (5) 理論と実践の関連への関心の深まり

## ●レポート課題と学習ポイント

**課題1** ジャック＝ダルクローズ著『リズムと音楽と教育』の任意の1章を精読し、ジャック＝ダルクローズの見解に対する自分の考えを述べなさい。

ここで指定した『リズムと音楽と教育』はリトミック音楽教育法の指導内容の解説ではなく、彼の音楽教育についての考え方を述べたものですから、ある種のマニュアルとはその読み方が大きく異なります。さらに日本ではあまり馴染みのないリズム用語が多用されていたり、具体的な音楽の内容と抽象的な内容が連続している部分などもあり、読みやすいとは言えません。しかし、そこには教室で子どもたちや学生たちを指導しながら身体運動を活用した音楽教育法を確立した作曲家、演奏家、そして音楽教育者であった彼の教育観が明確に示されています。

ご自分で任意の章を選択していただきたいと思いますが、第1章の前にある序章もその選択の中に加えてください。これはすべての章を書いた後でジャック＝ダルクローズがまとめとして書いたものですので包括的な内容が示されています。また第1章は彼の教育の基本となった、音を聴き取ることに重点をおいて書かれています。第2章は学校で教えられている内容についての見解が示されており、第4章は音を聴き取ることとリズムに関する学習の関連性について書かれています。

ジャック＝ダルクローズを肯定する見解であれ、批判する見解であれ、自由に論じてください。

**課題2** テキスト『音楽教育メソードの比較』の終章「特定のメソードを選ぶか折衷主義をとるか？」を読み、20世紀に創案されたいくつかの音楽教育メソードの理念、原理、実践方法などについて、様々な角度から論じてください。

深く検討するためには終章以外の章も精読する必要がありますが、身体運動や歌唱など、音楽教育をさまざまな側面から検討し、またさまざまな地域で活用されたこれらのメソードについて自分の実践経験とも関連させて論じてください。

## ●配本予定テキスト

- (1) ジャック＝ダルクローズ 著 『リズムと音楽と教育』(2003) 全音楽譜出版社
- (2) チョクシー 他著 『音楽教育メソードの比較』 (1996) 全音楽譜出版社
- (3) マルタン 他著 『エミール・ジャック＝ダルクローズ』(1977) 全音楽譜出版社

## ●参考文献

- (1) ジャック＝ダルクローズ著『音楽と人間』(2011) 開成出版
- (2) リング他著『リトミック事典』(2006) 開成出版
- (3) 山名淳著『夢幻のドイツ田園都市』(2006) ミネルヴァ書房

科目コード	016700
科目名	幼児教育特殊研究D（児童文化）
担当教員	羽矢みずき

●テーマ 「児童文化財の研究」

様々な児童文化財の中で、保育・幼児教育の現場や家庭教育との関わりの深い絵本をとりあげ、作品の表現や構造に即した分析と、子どもがそれをどう享受するかということについての観察と考察を通して子ども理解を深め、幼児の読書の特質を見極めます。

●研究の視点

- (1) 様々な児童文化財とは異なる絵本固有の表現の特質。
- (2) 絵本の作品研究。
- (3) 絵本と子ども読者の関わり。
- (4) 幼児の読書の特質。

●レポート課題と学習ポイント

**課題1** 子どもに読み聞かせたい絵本を1冊選び、その作品研究をしなさい。あわせて、どうしてその絵本を読み聞かせたいのか書きなさい。

子どもたちに読み聞かせる絵本を選ぶには、まず、自分が多くの絵本に触れる必要があります。絵本に出会う手引きとしては、参考文献（1）日本子どもの本研究会絵本研究部編『えほん こどものための500冊』、（2）『えほん こどものための300冊』などを参考にしてください。参考文献（3）鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史』などによって、絵本の歴史をひと通り理解しておくことが大切です。

子どもたちに読み聞かせたい絵本1冊を選んだら、実際に読み聞かせる前に、とりあげる作品について十分に研究しておくことが必要です。作品研究は、その絵本を作った絵本作家の他の作品もひと通り読み、その作家の描こうとしているテーマをつかむことから始めます。また、どうしてその絵本を子どもたちに読み聞かせるのかという自分なりのモチーフを形成して、子どもたちのいる場に臨んでほしいと思います。

絵本の作品研究の方法については、テキスト（1）棚橋美代子他『絵本論』、（2）谷本誠剛他編『絵本をひらく』、（3）佐々木宏子『絵本の心理学』を参考にしてください。様々な方法が試みられています。（1）巻末の付録「0歳からの絵本リスト」、（2）巻末の「絵本研究文献ガイド」も参考になります。

**課題2** 作品研究をした絵本を、幼稚園、保育所、児童館、地域・家庭文庫などの場で実際に読み聞かせて、子どもたちの様子を観察しそれを記述しなさい。また、その観察を通して、幼児の読書のあり方の特質についても考察しなさい。



絵本を読み聞かせたときの子どもたちの様子を観察し、それについて考察するためには、ビデオ撮影をするのもよいでしょう。読み聞かせのときの子どもの反応としては、言葉によるものだけでなく身体的なものも予想されるからです。撮影したビデオを繰り返し見ること、様々な発見があるでしょう。

作品研究を通して自分が捉えたものと、読み聞かせたときの子どもたちの反応には、何らかのズレがあるかもしれません。そのズレが幼児の読書の特質を考えるきっかけになるはずですが、考える中で、幼児の読書のあり方に関して何らかの仮説を立てることができたなら、その仮説を検証するために、さらに読み聞かせを重ねる必要があります。子どもたちの様子を観察しながら、考察を深めていく方法については、参考文献(4)宮川健郎『本をとおして子どもとつきあう』の第2章第4節「絵本と子ども」を参考にしてください。

絵本と子どもの関わりについては、参考文献(5)～(8)の村中李衣の著書にヒントがあります。

#### ●配本予定テキスト

- (1) 佐々木宏子『絵本の心理学』新曜社 2000年
- (2) 棚橋美代子・阿部紀子・林美千代『絵本論—この豊かな世界—』創元社 2005年
- (3) 谷本誠剛・灰島かり編『絵本をひらく—現代絵本の研究—』人文書院 2006年

#### ●参考文献

- (1) 日本子どもの本研究会絵本研究部編『えほん 子どものための500冊』一声社 1989年
- (2) 同上編『えほん 子どものための300冊』一声社 2004年
- (3) 鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史』Ⅰ～Ⅲ、ミネルヴァ書房 2001年～2002年
- (4) 宮川健郎『本をとおして子どもとつきあう—日ようびのおとうさんへ—』日本標準 2004年
- (5) 村中李衣『子どもと絵本を読みあう』ぶどう社 1993年
- (6) 村中李衣『お年寄りと絵本を読みあう』ぶどう社 1997年
- (7) 村中李衣『読書療法から読みあいへ—「場」としての絵本—』教育出版 1998年
- (8) 村中李衣『絵本の読みあいからみえてくるもの』ぶどう社 2005年

科目コード	017000
科目名	障害児者教育特殊研究B（障害児者自立支援）
担当教員	島田博祐

●テーマ 「障害児者のQOL（生活の質）と生涯学習支援」

従来の障害児教育は、「障がいを持っていてもできるだけ日常生活に不自由しない能力を身につけること」を主眼としたADL（日常生活動作）面重視のものであったが、ノーマリゼーションの理念に基づき、「障がいを持っていても各種の制度や施設などの社会資源を有効に利用しながら生活を楽しむ」といったQOL（生活の質）面重視の観点が必要になってきている。

障害児者の社会参加に向けての支援モデルに関しても、当事者の能力開発・向上を重視するAbility（個人能力）Modelから環境調整やナチュラルサポートに基づく付加支援を重視するStrength（相互作用）Modelへの転換が図られてきている現状がある。

障害児が学校卒業後も支援を受けながら可能な範囲で社会的に自立し、充実した生活を送るためには、個人のニーズに応じ且つ社会的妥当性が高い学齢期以後も見据えたカリキュラムを作成、実行することが不可欠である。

また学齢期以後の生涯学習支援として、大学など高等教育機関のバリアフリー化もあげられる。具体的には身体障害を持つ学生に対する支援サポート体制作り、知的障害者を対象としたオープンカレッジなどの試み等である。2001年にWHOから出された国際障害分類（ICF）において、社会参加の側面が重視されており、選択の幅を狭くされることを余儀なくされていた障害児者にとって学ぶ機会を提供することは、まさに社会参加とエンパワメントにつながると考える。

最後に障害児者に対する教育だけでなく、周囲の人間が障害を理解するための教育（障害理解教育）や社会づくりも課題となり、それには福祉・医療・労働・司法など様々な隣接領域との連携が不可欠である。

上記の観点を踏まえた上で、本講ではより専門性が高い博士課程であることを考慮し、一応の指針として以下に研究の視点を提示するが、上記の観点を踏まえた上で自身の研究課題との結びつきにおいて自由に論じていただきたいと考える。

●研究の視点

- (1) 障害児者の生涯発達支援を見据えた支援
- (2) 就学前・就学中・学齢期後を結ぶ移行支援
- (3) 高等教育のバリアフリー化
- (4) 生涯学習と支援について—社会参加の観点から
- (5) 障害児者の潜在的可能性（例：芸術分野など）を引き出す周囲の支援

●レポート課題と学習ポイント

上記(1)～(5)の例題を参考に、自身のテーマと関係する項目を2つピックアップし、自由に論じていただきたい。

●配本予定テキスト

- (1) 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子 『子どものQOL尺度 その理解と活用』  
診断と治療社 2014
- (2) 建部久美子他著 『知的障害と生涯教育の保障』 明石書店 2001
- (3) マグナス家族編 高橋亮・島田博祐監訳 『ある家族の愛の物語』 2004 文化書房  
博文社

●参考文献

- (1) ロイブラウン編著 『障害をもつ人にとっての生活の質』 相川書房 2002
- (2) Ivan Brown & Roy Brown: 『Quality of life and disability—An approach for  
community practitioners』 JKP 2003
- (3) 徳田克己他編著 『障害理解』 誠信書房 2005
- (4) 松矢勝宏編 『主体性を支える個別の移行支援計画』 大揚社 2004
- (5) 上田敏 『ICFの理解と活用』 萌文社 2005
- (6) 梅永雄二・島田博祐編 『障害児者教育と生涯発達支援・第三版』 北樹出版 2015
- (7) オープンカレッジ東京運営委員会編 『知的障害者の生涯学習支援—いっしょに学  
びともに生きる』 東京都社会福祉協議会 2010
- (8) 国立特殊教育総合研究所編 『発達障害のある学生支援ガイドブック』  
ジアース教育新社 2005

科目コード	017100
科目名	障害児者教育特殊研究C（小児保健）
担当教員	星山麻木

●テーマ 「障がいのある子どもとその家族への支援」

障がいのある子どもとその家族への支援をテーマに課題と将来への展望について考察します。教育、福祉、医療との連携、或いは連携を促すための実践的な支援方法や工夫など、自ら課題を見つけ、考察を深めます。講義と演習を交えて知識と実践力を深め、自らの知と感性を磨きます。先行研究の紹介、討論、プレゼンテーション、実技などを通じて、保護者や支援者に対する実際的な支援に対する考察を深めます。

●研究の視点

- (1) 障がいのある子どもとその家族をテーマに課題を見つける
- (2) 自らの立場と社会的な役割から、将来への展望を考える
- (3) 保護者と支援者に対する支援について

●講義計画

- 1 オリエンテーション
- 2 障がいのある子どもとその家族に対する理解と支援方法
- 3 現在の課題と連携の在り方に対するプレゼンテーションと討論
- 4 音楽や動きを通じての体験
- 5 障がいのある子どもとその家族への支援と将来への展望

**課題** 現在置かれている自らの立場や社会的役割を考えながら、障がいのある子どもや保護者に関する支援の課題について、考察しなさい。

教育に関わる人すべてに関連すると思われる特別な支援を必要とする子どもと保護者に対する支援について、考察してください。テーマはなるべく焦点を絞り、ご自分の興味のあるものを選択してください。現在のご自分の立場や社会的役割を考え、その課題について、社会に対する提言として、論じてください。【2種類（2通）のレポートを作成】

●配本予定テキスト

- (1) 村瀬嘉代子 『こどもと家族への統合的心理療法』 金剛出版 2001
- (2) 星山麻木 『この子は育てにくい、と思っても大丈夫 ～生まれてきてくれて、ありがとう 子どもに伝えたいあなたのために』 河出書房新社 2017
- (3) 星山 麻木 『障害児保育ワークブック<第2版>』 萌文書林 2017

●参考文献

- (1) 小宮 三彌 他『障害児発達支援基礎用語辞典』川島書店 2002
- (2) 竹田契一 他『幼児期軽度発達障害児への支援』発達 97 ミネルヴァ書房 2004
- (3) 東京 IEP 研究会 『個別教育・援助プラン』 安田生命事業団 2000
- (4) 藤崎真知代 他 『育児・保育現場での発達とその支援』 ミネルヴァ書房 2002
- (5) 本城秀次 編他 『就学相談と特別支援教育』 こころの科学 124 日本評論社 2005
- (6) 文部科学省 『児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン』  
東洋館出版社 2004
- (7) 杉山登志郎 『「ギフテッド」天才の育て方』 学研教育出版 2009